



6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本研究の成果はすべて博士論文に組み入れ、論文完成後は書籍としての出版をめざす。派遣期間中に受入機関のコロキウムで発表した文書学的分析の成果は、すでに文章化されている。教皇特使フーゴが発行した贖宥状に関しては、発行地、受給者、教会・修道院への寄付などの贖宥獲得条件、「40日」や「100日」のように時間の単位で表現される贖宥の大きさなどの観点から調査し、その内容を執筆中である。この成果を発表する機会として、2021年10月28日に開催される中世教皇史研究者のオンライン・カンファレンス(“Papstzoom”と呼ばれている)に招待された。

残された課題は、教皇特使フーゴによる贖宥状の大量発行が「大空位時代」における教皇権と皇帝権の対立とどのように関連していたのか考察することである。フーゴの派遣目的は、教皇が擁立した対立国王ウィレムの支持拡大と、神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世亡き後の皇帝家の勢力抑制だった。つまり贖宥状の大量発行は、中世ヨーロッパ世界の二大権力が対立する政治的に緊張した状況でおこなわれたのである。これを踏まえれば、贖宥状と同時代の政治状況を関連づけて調査することによって、教会の腐敗を象徴するものとして激しく批判される以前に、贖宥状が教会政治上の装置としてキリスト教世界に浸透していった過程が明らかになることが期待される。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

ドイツの研究機関に滞在することで得られたことの一つは、ドイツ語で文章を書く習慣である。派遣期間中、受入先のハラルド・ミュラー教授と毎月面談し、その度に原稿を添削していただいた。この面談をペースメーカーとして執筆を進めることで、ドイツ語でのライティングの能力を向上させることができた。

もう一つは、研究者の国際的な交流の場に参入できたことである。これは、学会・研究会のオンライン化の影響でもあった。2021年5月以降、ドイツのベルク大学ヴッパータールのイエシカ・ノヴァク博士とヨーヘン・ヨーレント教授が企画した中世教皇史研究者の研究会Papstzoomが毎月開催され、毎回ヨーロッパだけでなくアジアからも計50名ほどの研究者が参加しており、上記のようにわたしも本研究課題の成果を発表する機会を得た。この研究会では研究者同士の交流に重点がおかれている。発表と質疑に加えて、少人数グループにわかれて歓談する時間をとり、おのおの共同研究の可能性について議論している。研究のトレンドを生み出す研究者たちと定期的に交流する場を得たことは、今後の自身の研究活動にとって非常に大きな意義があると思う。Papstzoomはすでに2022年もオンラインでおこなわれることが予定されているため、引き続き参加して今回の派遣で得た研究者ネットワークを維持したい。